

中国現代詩
三十人集

ヒゲニスル詩のルネッサンス

是永
駿
編訳

凱風社

中国現代詩
三十人集

ヒダニズル詩のルネッサンス

中国現代詩三十人集

モダニズム詩のルネッサンス

1992年2月28日初版第1刷発行

©1992 Shun Korenaga

0098-920275-1136

●編訳者……………是永 駿

●発行者……………小木章男

●発行所……………株式会社 凱風社

東京都文京区後楽2丁目22番12号 新栄社ビル

☎03-3815-7633

郵便振替 東京5-88715

●印刷……………猪瀬印刷

●製本……………猪瀬印刷(製本部)

●写真……………猪瀬印刷+地球企画

▼定価はカバーに表示してあります。

▼本書は著作権法上の保護を受けています。本書の一部あるいは、全部について株式会社凱風社から文書による許諾を得ずに、いかなる方法においても無断で複写、複製することは禁じられています。

▼落丁、乱丁本は凱風社営業部にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。

火種

現代中国文芸アンソロジー

総目次

日本語版への序	編者
一九八九年日本語版への序	編者
序文	編者

第1章 壁

幸福街十三番地	北島
無政府主義的傾向	〔文芸報より〕
壁	舒婷
黒い壁	劉心武
中国文化の深層構造 身内重疊のネットワーク／身内と外部者／船内の壁	孫隆基
重荷の(1)	楊煉
重荷の(2)	江河
回り道	陶駿
地下壕	陳若曦
古い物語	江河
第2章 プロレタリア独裁——中国の矯正収容所	
矯正収容所での殺人	劉貴麗

第3章 妖怪

矯正収容所について	シモンレイ
北大荒の夜明け	唐祈
矯正収容所三景	包若望／ルドルフ・ケルミンスキー
幹校六記 労働の記	井戸堀り
雲夢斷憶 「甲骨文の思い出」	楊緯
下放点描	吳歡
WM・冬より	王培公
WMの批評について	李怡
権力の幽霊	〔「快報」より〕
幽霊が中国の大地をうろついている	孫静軒
形を変えた迷信	王希哲
大長老を尊崇する	孫隆基
深刻な欠点のある作品	孫静軒
埋もれた龍の骨	金観濤
大雁塔	楊煉
停滞の深層構造	孫隆基

タイマツ

楊煉

ノーランより

楊煉

醜さの研究

孫隆基

第8章 黄色い大地

黄色い大地

張子良

黄色い大地の出現

李陀

黄色い大地をめぐって

陳凱歌他

第9章 鉄格子の向こうの炎

さらば、民主の壁よ

凌冰

社会主義的民主主義

王希哲

王希哲に代わつての請願書

李怡

教育と処罰

孫隆基

五番目の現代化

魏京生

反対意見

魏京生

秦城一号監獄——〇世紀のバチスタ監獄

魏京生

逸脱と一致

孫隆基

鉄格子と炎

曾卓

虎

牛漢

獄中手記

劉青

人權

徐文立

第10章

影の告別

もしまだ元気でいたなら——我が敬愛する補遺先生に捧げる

章玉安

秋の夜に

尤瑪蒂

「偉大な数」

シモン・レイ

影の告別

魯迅

補遺 火種

方勵之とティツィアーノ

劉賓雁

劉賓雁言論選

方勵之

方勵之言論選

哈公

笑翁妄言——その主眼は「我を知らぬもの」

吳祖光

中央紀律委員会への手紙

吳祖光

独裁者とインテリ

明書

北島訪問記

熊復

劉曉波とのインタビューから

熊復

熊復言論

熊復

今は何もない／俺は知ってる

崔健

プロレタリア独裁による裁判

徐文立

監視／辛抱強さと無力

孫隆基

処刑場へ

江河

消えぬ恐れ

蘇明

第4章

ヒューマニティ

社会主義ヒューマニズム

王若水

人道主義者の害毒

胡喬木

浮浪者 何荆夫

戴厚英

私のヒューマニティの誕生

戴厚英

生活に関する誤った解釈

『文芸報』より

身障者へのヒューマニズム

郭樸方

真の人間に至る長い道のり

孫隆基

知恵の歌

穆旦

第5章

とげ

醜い中国人

柏楊

ある醜い中国人

王亦令

笑翁妄言

哈公

その一「并進士統敘制のこと」
その二「貴山は何主義かのこと」
その三「資本主義を振りまゐること」
その四「塩漬り無し真珠の列ありのこと」

雷雨の夜

尤瑪希

寓言集

黄永玉

第6章

曇り——しかし雨は降らない

新婚の夜

性意識と性的抑圧
遇羅錦

第7章

霧

汚れた心

遇羅錦

真実とは

蔡運柱

豚と売春婦について

李昂

馬の口から

張賢亮

『男の半分は女』の話

牟君宜

中国人の性意識の深層構造

孫隆基

彫刻について

吳少湘

霧の宣言

洪荒

回答

北島

すべて

北島

古き寺

北島

履歴

顧城

「朦朧詩」問答

顧城

一群の青年たち

李小山

新しい詩・魂の通路

徐敬聖

自己批判

徐敬聖

ここから始めよう

江河

ブドウの園

芒克

誕生

楊煉

「伝統と我々」

楊煉

詩の讃歌

楊煉

目次

中国現代詩二十人集

モダニズム詩のルネッサンス

I 詩篇

●北島

五色の花 8
ある日 9
回答 10
追憶 13
眠れ、谷間よ 14

きみが言う 17
共犯者 19
悼む——六・四受難者のために 21

●芒克

漁師の兄弟たちへ 23
春 25
水面みなもからの風 26
死してなお老いさらばえる
ことがある 28

●舒婷

杭城に送る 32
出会い 34
詩画——少女と泉 36

●顧城

名もなき小さな花 37
浄土 39
河口 40

●楊煉

隕石 42
合歡花ねむのはな 44

●顧城、楊煉

弔辞 46

●多	無題	50	青春	51	死の方角から見	52	北方の夜	53
●江	遺言	57	きみ	64	誕生日	65		
●趙	きみに贈る	68						
●嬰	ほんとに知る必要があるの？	74	路	76				
●柏	青の性格	79						
●楊	死亡ソネット	81						
●周	第二のいつわりの門	83	火をともした蠟燭を見る	85	巨鳥 おおとり を想う	87		
●邢	声	92	遠くで一本の釘 くわ がわたしを痛めつける	93	城市 まち	95		
	冬も時には寒くない	97						

●翟永明

予感 98

渴望 100

独白 102

証明 104

●駱一禾

吹雪をつきぬけて 107

黄昏 110

●歐陽江河

骨を刺すいちばんの焰^{ほのお}である海水 115

●島子

雪祭り 117

●雪迪

飢餓 119

●韓東

コップを聞く 121

●西川

ハルカイ
哈爾蓋に仰ぎ見る星空 123

●陸憶敏

四月十日 125

●老木
闇の夜を飛んできたハト 127
分析 129
あの大雨の追憶 131

●娜日斯
夜に入る 133
深い秋 136
夜半の時刻に歩み入る 138

●陳東東
雨の中の馬 140
経駿 142

●孟浪
四月のモザイク 144

●宋琳
都市の二——瘋狂の兆し 148
柱の上の人 151

●海子
最後の一夜と第一目の献詩 154
闇の夜の献詩 155

●瀟瀟
待つ 158
冬 160

●默默
このような 162
わたしの命令 164

●大仙

歳末ソネットの二十 166

歳末ソネットの二十二 168

II 中国現代詩論

- 一、概観 172
二、展望 176
三、視点 195
四、詩と詩人の位置 203

◆詩集・詩選目録

210

◆日本語訳書ほか

211

◆出典一覧

212

あとがき 216

I
詩
篇



北島

五色の花

深い奈落のふちで

きみはわたしの孤独な夢をひとつひとつ見守る

——あの草の葉をなびかせる風のざわめきを

太陽はかなたでしらじらと燃えている

きみは水溜りの傍で

自分の影を投げ入れ

さざ波が立ち、きのうという日を沈澱させる

●北島（ペイ・タオ）

本名趙振開。一九四九年北京生まれ。高校在学中に文革勃発、約十年間建築労働者として働く。七八年『今天』創刊、九〇年『今天』復刊、いずれも主編。現在デンマーク在住。

もしきみもいずれしおれるときを迎えるのなら

わたしは単純な希望を抱くだけだ

はじめて花開いた時の静かな物腰のままでいてほしいと

一九七二年

ある日

抽斗ひきだしの自分の秘密に鍵をかけ

愛読書に批評を書きとめ

手紙をポストに投げ入れ、しばらく黙々とたたずみ
風の中を行く人々をうちながめ、何の気かねもなく
ネオンに映えるショーウィンドーを気にとめ

電話室で硬貨を一枚投げ入れ

橋の下で釣りに興じる老人にタバコをせがみ

川蒸気船がおおどかに汽笛を鳴らし

劇場の入口のほの暗い姿見の前で

煙霧^{もや}をすかして自分を見つめ

窓のカーテンが星空の喧騒を遠ざけると

色褪せた写真と筆跡^{ひもと}を灯下に緋く

回 答

卑劣は卑劣な者どもの通行証

一九七四年

高尚は高尚な者たちの墓碑銘

見よ、あの金メッキされた空に

逆さに漂い満てる死者たちの湾曲した影を

氷河期は過ぎ去った

なのになぜどこもかしこも氷なのだ

喜望峰は発見された

なのになぜ死海では千の帆船が競っているのだ

この世界にわたしはただ

紙と縄と影とをたずさえてやってきた

審判の前に

あの判決を下された声を読み上げるために